

ずっと好き。



八尾

〔大阪府〕

校門の横にある名物のユーカリの前で。多くの卒業生の思い出の木

基本的なプレーを徹底してくり返す。特にコンタクトプレーに注力する
1992年に高校日本代表、翌年に日本代表に選ばれた藤原匡さん(同大→セコム)も同校OB



高校ラグビーの聖地から見える空と山が、そこにもあった。
花園から見るとより生駒山系は遠いけれど、見ええのある形だ。八尾高校は中河内地区の公立高校の中でいちばんの進学校。近鉄八尾駅から10分強のところにある。JR八尾駅(関西本線)からの距離も似たようなものだ。
同校ラグビー部は今年、節目の年を迎えた。1928年に誕生した部は、2018年がちょうど創部90周年にあたる。

部のOB会長である中山高廣さんが愉快そうに言った。
「うちには、ふたつの自慢があるんですわ。90年もの歴史があるのに、花園に出たことがない。そうなのに、グラウンドは大阪の府立高校の中で有数の広さ」(鳳高校に次いで2番目)
実際、その校庭は400mの陸上トラックがすっぽり入って、まだ土地が余る。ラグビー部はその一角、軟式野球部のレフトの位置あたりがいつもの練習場所だ。

この中山さんも、となりで八尾ラグビーグッズのひとつ、ポーチバッグを肩にかけている中西信有さんも、自分たちが青春時代を過ごしたクラブのことが大好きだ。中西さんは、6月3日に催した「創部90周年記念試合&式典」を含む周年事業の実行委員長を務めた。
記念の宴には多くの人たちが訪れた。午前中は地元ラグビースクールの試合やOB戦がおこなわれ、現役部員は高津高校と試合をした。
午後の記念式典は盛り沢山だった。

た。来賓や個性あふれるOBたちの話に笑い、記念トークイベントには村上晃一氏、藤島大氏とラグビーメディアの重鎮が参加。「高校ラグビーに大切な事」がテーマの記念トークイベントが人々を楽しませた。
▼こだわりの歴史。
同校ラグビーのエンブレムにある狐は、学校の敷地内にある「狐山」に由来する。



熱血漢の中出智之監督。タックルが強そう

90年前に部が誕生したとき、学校は旧制八尾中だった。創設の中心となったのは、当時体育を教えていた山田祐治先生と、府庁に勤務し、学校近くに住んでいた中島好一氏。
「今度、英田にラグビー場ができるので、同じ中河内の中学校にラグビーがないのはまったく淋しい。これからはサッカーよりも時代に順応した運動になりますよ。ぜひ、やってみませんか」
中島氏が山田先生にその声をかけて部のうぶ声があがった。

6年目の1933年、畝傍中から部史上初めての勝利。21年目の1948年には初めて近畿大会に出場した。

四條畷や北野、天王寺といったライバル校に勝利する歴史を積み重ね、1950年代、'60年代には花園予選の決勝まで何度か進出した。1975年度には当時3年生の三宅秀和が高校日本代表に選ばれ、イングランド遠征に参加している。

近年は目立った成績は残せていない

い。ときどき部員数が15人に満たず、合同チームで大会に出場することもあったが、歴史はなんとか紡がれている。90周年記念行事では、多くの人の口から「100」への意欲が聞かれた。

このクラブが魅力的なのは、すべてにおいて、なんとなくやっついなところだ。1980年からはOB会誌「ラガー」を発刊し、それがタテの糸となつて各年代をつなぐものとなった。

今回の記念式典の準備も気合いが入っていた。実行委員長の中西さんは出張先の福岡で、先に90周年を迎えていた同地の名門、福岡高校と修猷館高校の周年記念事業の事務局長との縁を探し出し、アドバイスをもらった。

「準備の会議と言いながらOBの店に集まっただけ、ただ飲んで終わったことも、何度もありました」

中西さんは、穏やかだ。

八尾のOB会には、お金は出すが、口は出さない、本当に優しい集まり



広い校庭。多くのクラブが活動し、活気がある



練習後は全員で整地。先頭が川畑遼主将

り。中山会長は「(言いたいことは)ここまで出てきていますがね」と喉の上に手をやるも、現役生の笑顔を見るのが何よりも好きだ。

▼ただの3年間じゃない。

現在のチームは、保健体育科の中出智之先生が指導している。

富田林高校、京都教育大に学んだF氏は、今年で現職6年目。19人の選手たちに基本プレーをくり返し教えている。

これまで、流行のスタイルをチームに落とし込もうとしたこともあったが、今年は学校のモットーでもある「質実剛健をテーマにチーム作りを進めている最中。個々の幹を太くし、骨太のラグビースタイルを自分たちのものにしたい。取材の日も、2時間間の練習時間の多くをシンプルなコンタクトプレーのレベルアップに費やした。

ラグビーどころ大阪とはいえず、公立普通科高校の現状は厳しい。部員

数も少なければ、ラグビー経験者も各学年に1〜3人ほど。そんなスタートから、限られた時間で実力校と伍していくチームを作ろうと思うなら、普通にやっついてはダメだ。先生は毎年、その年の部員たちの顔を見ながら試行錯誤をくり返している。

昨年は3年生も多く、ケガ人が出て14人で公式戦に臨むことがあったも、格上から勝利を手にすることもあった。しかし今年は3年生が少なく、4月の大会では10人制へのエントリーを余儀なくされた。ここからが正念場だ。

勝負を追えば、決して笑ってばかりはいられない現状。中出先生も頭を悩ませることがあったが、今回の90周年記念事業でOBたちと会い、感じたことがあった。

「OBの皆さんは、それぞれ仕事もしているのに、本当に一生懸命やってくれました。その情熱は何なのか、と考えてみたくです。八尾での3年間が人生の中で大きく、卒

業して何年経っても生活の一部にある。ラグビーに打ち込んだ3年間が充実しているからそうなのだと思うと、私も生徒がそういう3年間を過ごせるように育てていかないとけないな、とあらためて思いました」

真っ黒に日焼けした顔。誠実に教え子たちと接する。

▼ずっと好きだ。

今年のチームでキャプテンを務める川畑遼は、みんなに推薦されてリーダーになった。ラグビーは高校から。168センチ、85キロの体には、筋肉がギッシリ詰まっている。

中学時代までボクシングをやっていた、団体スポーツに憧れていた。そんな理由でこのクラブに入ったキャプテンは、右肩を何度も手術して満足にグラウンドに立てていなかった自分がリーダーに選ばれた理由を、こう考えていた。

「去年の夏も怪我をしていました。でも、暑い中でみんながきつい練習をやっていたから、声だけは出し続けて、チームを盛り上げたんです。そんな姿を、みんなが見てくれてたのかな、と思ってます」

川畑主将は残り少なくなってきた高校ラグビーの日々をにらみ、「毎日毎日やり切った秋に向かい、試合を一戦一戦大事に戦う」と決意を口にした。

キャプテンはある試合を見て、ラグビーをあらためて好きになったし、勇気をもったと言った。

「去年の秋の、3年生の最後の試合です。千里高校と、このグラウンドで戦った花園予選でした。僕は入院と退院をくり返していて、その日は

ちょうど退院のタイミングと合ったから応援しました。先に3トライを取られたのですが、2トライを返して追った。負けましたが、最後まで戦い抜いて、やり切ったことが伝わる試合でした」

格好いい先輩。一緒に泣いた。自分も同じように、この部でのラストイヤーを出し切って生きようと誓った。八尾ラグビーのスピリットは、きつとこうやって受け継がれてきた。

中出先生は、「うちの生徒は全員、タツクルにいく勇気はある」と言った。キャプテンは、肩の状態を考えたならプレーは高校で終わりがもしれないと言いつつも、「ラグビーをいつまでも好きでいる」と真つ直ぐこちらを向いた。

八尾の90年は、一人ひとりの青春の1ページが重なっているから、重く、いつまでも色褪せない。

土のグラウンドに西日が差し込んでいた。変わらぬ風景が、いつまでも残っている。いいな。



6月3日に催された90周年記念式典。丁寧な準備で最高の時間に